銀の波と缶ビール

竜太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀の波と缶ビール

【Ｎコード】
Ｎ９８２３Ｇ

【作者名】
竜太郎

【あらすじ】
坂崎は３３歳。毎日、年をとっていくことを改めて気がついてしまう。そして・・・。是非評価をお願いします

時間の流れるのは早いものだな。
坂崎健一は、銀行口座開設の順番待ち番号札を手のひらでもてあそびながら思った。口座開設用紙に記入した己の年齢に自分でもびっくりしてしまったのだ。
３３歳。
世間ではまだまだ若手かもしれない。未熟者の青二才だといわれてもおかしくはないだろう。
しかし・・・。
隣の席で額のせりあがった初老の男性が新聞を眺めている。万人に等しく時は流れる。いつか俺も頭皮が薄くなり、皺が増え、年輪を重ねるように年をとっていくのだろう。
いや、だろうか？　本当に年をとるのだろうか？
オギャアと産声を上げて、両親に慈しまれ育ち、反抗期を向かえ少しばかり世間に迷惑をかけながら、成人に達した。結婚して、子供が二人、マイホームを建て３５年のローンを背負う。大好きで、大嫌いになり、やがて認め合うようになった父親は他界した。
よくある人生。俺の３３年。
やっぱり俺も年をとるのだろう。
口座を開設してマイホームに帰る。マイホーム、夢のマイホームというが、契約書に印を押したときも、上棟式でもち投げをしたときも、引渡しでついに自分のものになった瞬間も、創造していたような感慨は沸いてこなかった。
家の中は静まり返っている。妻が週末を利用して子供たちを連れ帰省しているのだ。走り回り機関銃のようにしゃべりまくり、ばったりと電池が切れるようにどこでも寝てしまう悪魔のような天使たち。けっして天使のような悪魔ではない。悪魔のときのほうがダントツで多い。

「おばあちゃん。おばあちゃん。」
天使の顔で呼びかけられれば義母はひとたまりもないのだろう。ところけそうな義母の笑顔が容易に想像できる。
静かな家の中でパソコンの電源をいれ、立ち上がりまでの時間に冷蔵庫からアイスコーヒーのパックを取り出しコップに注ぐ。デスクトップの壁紙に当然のように子供たちの笑顔が飛び出してくる。東京ディズニーランドのアトラクションで満面の笑顔を振りまいている写真だ。子供たちの笑顔に掛からないように配置されたアイコンをクリックする。広告料を目的にはじめたホームページはアクセス数が伸び悩んでいた。機械加工というごく限られた分野の専用ページだから、爆発的なアクセス数は期待してはいなかった。しかし職業的に必要な情報をくわしく提供できればある程度の数字は叩きだせると踏んでいた。坂崎は機械加工を専門とした１１年のキャリアを持っている。昨日のアクセス数を見て舌打ちをする。舌打ちをしながら日記の更新を始める。けっして悪くはない。
内容をさらに充実させればアクセス数は伸びるはずだ。何度か挫折を繰り返しながらも１年以上、日記を更新できているのは「いつかはきっと」という楽観主義的な性格から来る希望的観測のおかげだろう。
しばし頭の中身を仕事モードに切り替える。今日の日記のテーマはアルミ合金と刃物寿命に関してのデータおよび私的所見だ。
半日かけて日記の更新をする。腹が減っていたので時計を見ると１４時を回っていた。３時間あまり集中していたことになる。更新したページを見ると、何度も裏切られているのに今度こそという期待感と充実感が沸いてきて一人ほくそえんでしまう。
何か食いにいこう。家を出ると外はからりと晴れた良い天気だった。銀行に行った時には感じなかったが今日はいい天気なのだ。坂崎はふと思いつき家の中に戻り冷蔵庫から缶ビールを取り出し、つまみに豆菓子とソーセージをポケットに詰めた。そして、庭先にある倉庫の扉を開けた。そこには、雑多なものに混じってサーフボー

ドが立てかけられている。手前にある荷物をどけサーフボードを取り出す。
手に取るのさえ5年ぶり位だ。サーフボードは薄い埃に汚れている。
　朝日と共に海に向かっていた少年はきっかけもなく、本人も気づかないまま海に行くのが遠ざかっていた。時々、思う。
「俺はまだ波に乗れるのだろうか？」
仕事や家族や、社会的責任を果たそうとすれば・・・・。違うな。よき父親であろうとすると・・・違うな。
自分でも良く分からなかった。だが、負けず嫌いで挑発的に世間に食ってかかった少年の髪の色が、金色から茶色になりおとなしい黒に戻った時には、自分にサーフィンをする資格がないように思えた。サーフィンは一般人とは違うという自分なりの目印だった。
　車にボードを積む。
また波乗りをするのか？
自分に問いかけてみる。答えは分からなかった。
　だか、少しどきどきしながらもウエットスーツと、水を満たしたポリタンクを準備する自分が嬉しくも在った。
　波はあがっているだろうか。台風のようなうねりがあっても困るのだが。
　準備が整うと海に急いだ。若い頃はサーフィンをするのに使い勝手の良いバンにのっていた。今は後部座席にチャイルドシートをくくりつけたファミリーカーだ。助手席で斜めになったボードが狭苦しいと文句を言うようにずり落ちてきては運転の邪魔をする。車を走らせ１０分。松林を抜けると海が見える。嬉々としながら目前に迫った松林をすかして、太陽光を反射して銀色にきらめく波しぶきを創造している自分がおかしかった。リズム良くハンドルを叩き、窓を全開にし、口笛を吹き、気取ってサングラスをかける。タバコだけはあのころと同じ［ＫＯＯＬ　ＫＩＮＧ］　あの頃にタイムスリップした気分だ。バンの中でサーフボードに塗るワックスの臭いに自惚れ、ナンパした女の香水の香織に大人の色気を感じ浮き足立

っていた。きっと安物のコロンだったに違いない。それでよかった。それが最上級だった。
松林を抜ける。海は目前だ。わずかばかりの坂道を登りサングラス越しにも眩しい太陽の光に目を細める。やがて車が水平になると白い砂浜の向こうにどこまでも青い海が広がった。
果たして波は銀色に輝いていた。
車を止めＫＯＯＬをくわえて目を細める。オフショアの海風に誘われるように砂浜まで歩く。革靴を履いていることに気がつきあわてて脱ぎ捨て車の下に押し込んだ。
「ださいったらありゃしない」
初めて知った女は舌足らずで、ショートヘヤーだった。その女によくこういわれた。
１０人位のサーファーが海に出ている。波の高さは腰ぐらいだろう。さらさらと崩れる波はパワーが乏しくスピードが乗らない。アップダウンをしている内に波が消えてなくなってしまう。若者にはスリルの足りない波だ。
「俺にはちょうどいいかもナ」
自嘲的に笑うとアウトのほうからうねりが入ってきた。今までの波とはレベルが違う。陸から見ていると波の様子が手に取るように分かる。
「ビックウェーブだ」
海の中にいるサーファーはまだ気がついていない。大きな波はより沖のほうで崩れる。崩れる前に波のピークをつかまなくてはならない。
一人のサーファーが猛烈な勢いでアウトに向かってパドリングをはじめた。真っ赤なサーフボードだ。それにつられてほかのサーファーもパドリングを始めたが、ピークをつかんだのはやはり赤いサーファーだ。
くるりとボードを反転させると、今度は波に背中を向けてパドリングを開始する。うねりか近づく。引き上げられるよう波の頂点ま

で赤いボードが持ち上がった。ボードの先端が波間に向って直落していく。
水しぶきを撒き散らしながら銀色に輝く波は、切り立った岸壁のように直立になり、飽和したエネルギーが弾け飛ぶように一気に崩れ赤いサーフボードを飲み込んだ。赤いサーフボードもサーファーも見えなくなった。
「飲まれたか」
ビックウェーブはドミノのようにピークから裾野に向って弾けていく。切り立った波の先端が飛び出すように崩れる波は懐にチューブをこさえている。
「イーッヤッホー」
崩れ始めた波の隙間から赤いサーフボードが飛び出してきた。思わず見とれた。体を小さく丸めチューブの中をサーフボードが疾走している。赤いサーフボードが通り過ぎるとその時を待っていたかのように轟音を立てて波が崩れていく。崩れ行く波を背中に背負っているようだ。派手なしぶきはいくつもの色彩に彩られはかなく消えていく。
チューブにはいった者だけに与えられる称号。チューブマスター。チューブマスターだけにしか見ることの出来ない世界があるという。波のトンネルの内側からすかした世界は、波と太陽の魔法の世界だという。
崩れた波の後には白く濁った泡がしばらく続いた。サーファーは最後の雄叫びを上げ波を締めくくった。
そのまま陸に向ってパドリングをしてくる。
どんなサーファーなのだろうか？興味があった。
海から上がったサーファーは赤いボードを小脇に抱え小走りに近づいてきた。
何か声をかけてみようかなと思う。
いよいよサーファーが近づいてくる。
そのサーファーは額が禿げ上がったうえに白髪の目立つ初老に近い

感じだった。思わず声を掛け損なった。男性はなれた感じでボードをしまうと水を浴び着替えを始めた。
取り出したのは白いワイシャツ、紺のスーツだった。足元は革靴で眼鏡をして髪の毛は7対3で分けた。
坂崎は思わず噴出しそうになった。
ネクタイだって、7，3だってサーフィンは出来る。
気取らなくたっていい。俺だってできるんだ。
「ださいったらありゃしない」
もう一度海を見ると、沖のほうから大きなうねりが入ってきていた。
「ビックウェーブだ」
坂崎は車に向って駆け出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9823g/

銀の波と缶ビール

2010年10月12日01時03分発行